

第2回田中・柏の葉コミュニティエリア検討会議議事録

1 日時

平成30年8月4日（土） 10時00分から12時00分

2 開催場所

東葛テクノプラザ第2研修室

3 出席者

(1) 委員

岡田孝夫委員（田中地域ふるさと協議会）、根本利治委員（柏市ふるさと協議会連合会）、増田明委員（柏市若柴町会）、伊藤孝委員（新若柴町会）、増田勝美委員（東十余二町会）、金井哲治委員（柏の葉一丁目自治会）、米山諭委員（柏の葉二丁目町会）、石毛伸委員（柏の葉三丁目町会）、坂田菜津子委員（柏の葉キャンパス一番街町会）、山境秀文委員（柏の葉キャンパス二番街町会）、深野千都子委員（柏の葉キャンパスゲートタワー管理組合）、山下嘉人委員（柏市社会福祉協議会）、三牧浩也委員（柏の葉アーバンデザインセンター）、大野正英委員（麗澤大学経済学部）、飯田晃一企画部長、篠原忠良市民生活部長、宮島浩二保健福祉部長、南條洋介都市部長、高橋直資地域づくり推進部長

(2) 事務局

ア 田中近隣センター

西内所長

イ 地域支援課

沖本課長、染谷主幹、老川主査、本間主事、土屋主事及び照沼主事補

4 配布資料

(1) 次第

(2) 説明事項1 第1回検討会議のふりかえり

(3) 説明事項2 田中・柏の葉コミュニティエリア字別等人口

(4) 協議事項 境界（地区設定）について

(5) 資料 コミュニティエリア施策展開の影響

(6) 田中・柏の葉コミュニティエリア検討会議設置要領

(7) 田中・柏の葉コミュニティエリア検討会議出席者名簿

5 議事概要

(1) 開会

(2) 議事

ア 説明事項1 第1回検討会議ふりかえり（染谷主幹）

イ 説明事項 2 田中・柏の葉コミュニティエリア字別等人口（染谷主幹）

ウ 協議事項 境界（地区設定）について（染谷主幹）

【質疑応答・意見】

（大野委員長）

では今の事務局からの説明につきまして何か質問、意見等あれば。

（根本委員）

案3になった場合、ふるさと協議会は新たに2つできるということか。

（地域支援課染谷主幹）

そのとおり。コミュニティエリアの数だけふるさと協議会もできるという考え方になる。

（金井委員）

随所に地域の実態や地域特性、地域住民の意識という言葉がでてくるが具体的にどういう意味か。

（地域支援課染谷主幹）

防災に力を入れているが、なかなか田中のエリアの人たち、マンション群の人たち、柏の葉1丁目～3丁目の人たちと考え方が違ってきているということがある。

（金井委員）

その中身が知りたい。住まいの形態が違うのは当然だが、それによって、どういう意識の違いがあるのか、どういう実態の違いがあるのか、地域特性がどう違うのかというのを具体的にしないとそれを分割の基準であるかのごとく議論しているようだが、とんでもない誤解を招くと懸念している。

（大野委員長）

逆に言うと、住民の皆さんの中で前回もそういった話題がでていて、漠然としたかたちでは出てきていたかとは思いますが、明確に地域特性といった皆さんの中でどういうふうに考えているかということとどういうふうに分けた方がいいのかということをお話し合っていく場でもある。

（金井委員）

分割の基準を考えるにあたって、何のためにコミュニティを設置するのかという原点に立ち返って、地域活動を損なわないということがある。時代が変わると、そもそも地域活動とは何かということに戻らないといけない。2025年問題があり行政の最大の課題は高齢社会になっても安心して住めるまちづくりをどうするかだと思ふ。地域活動の目的は高齢社会をどう乗り越えていくかというのが争点になるだろう。そのときに年齢とか職業とか、そういうもので地域を分けるのが本当に適切なのかということをお考えいただきたい。

（大野委員長）

非常によい論点をだしてもらった。前回の宿題として各町会で意見を聞いていただければということをお願いしたが、いかがか。

(増田明委員)

個人的な考えだが、2案がいいと思う。町会内で細かい話は出来ていない。いづれ分かれるだろうという話はしている。人口的に考えると案2が理想であると考えている。

(伊藤委員)

分けるのは素晴らしいことだと思う。町会の子どもは松葉のほうにほぼ通っている。子どものために、いままでの過程の中で作られたものを直していくのは相当の時間が必要ではないかと思う。

(増田勝美委員)

役員間で話をした。全員の意見をまとめることはまとまりがつかない。時期を見ながら、現状では今のままで当分の間は進めたい。ゆくゆくは案1になるのがよい(人口、面積の面を考えると)とは思いますが今は難しい。

(金井委員)

役員会の意見としては分割は早くしてほしい。現在はコミュニティの規模が大きすぎる。行政として小回りが利くほうがよいだろう。

(米山委員)

役員会が行われていないので話せていない。

(石毛委員)

役員レベルで話をした。案1になっても案2になってもあまり変わらないのかなという意見。自分の町会だけで言うなら案1のほうがより狭い地域になるので活動しやすいのではと思う。案3についてはないかなと思う。検討材料としては有りだと思うが、コストの面を考えると現実的でない。案1か案2がよいと思う。

(坂田委員)

7月に役員が替わった。実際考えると民児協エリアが案2で活動していることも考えると個人的にはコミュニティエリアとのズレが生じると実際に活動していく人たちのことを考えると案2がよいのではと思う。

(山境委員)

コミュニティエリアを分けることに関して異論はない。役員間では案1と案3が多かった。行政面のコスト、人口面も考えると案3より案1がよいのでは。一丁目～三丁目は西原と活動しているものもあるので、そこは最大限尊重しないといけない。案2で分けてしまうと、また2年後ぐらいにコミュニティを分けるという話になると思うので現実的でない。そう考えると案1がよいのではないか。

(深野委員)

案3は人口が少なすぎて現実的でない。エリアを分けることは賛成。住民としては行政に任せる。人口的に案2だと現実的でなくなってしまう。案1がよいのでは。

(大野委員長)

各町会から意見が出たが、それを踏まえて何か意見があるかたいですか。

(岡田委員)

地域の特性について、もともと田中地区は農業地域である。原則的に農家の考え方。皆さんと違うのは土地へのしがらみが強い。先祖から引き継いだ土地を守るという考え方が強い。三世代、四世代と一緒に住むというのが原則としてある。それを代々つないでいくというのが田中地区の考え方。自主防災も自分達で守ろうという気持ちが強い。

(大野委員長)

前日も話題になったが歴史的な経緯を踏まえてということで非常に重要なことであって、それと先ほど言われたように現実的に抱えている目の前の問題とどうすり合わせていくかというのが一番大きな問題なのだと思う。ほか、いかがだろうか。

(山境委員)

もともと中学校ができたことがエリア検討の契機になったと聞いていたが、コミュニティエリアを分割したとしても学区が変わるわけではない。学区が改善されるわけではないと思うが、そのあたりはどうか。

(地域支援課染谷主幹)

教育委員会にこの旨聞いた。当初は中学校区ひとつにコミュニティエリアひとつだった。昨今、生徒数の関係や急激に人口が増えたりというところで学校のキャパシティが間に合わなかったりしているところがある。学校の大きさに合わせて生徒を投入するのが主流になってきている。今後もそういったかたちで学区が決まってくるのではとのことであった。当初、柏の葉コミュニティエリアを作るときには中学校区にひとつというところで作ってきた経緯はあるが、そういう面から柏の葉中が開校するのをひとつの契機としてよいのではないかとというところで提案をさせていただいたところであるが、中学校区とのズレは解消されないままというところで進んでいる。

(金井委員)

案2であれば解消されるのでは。

(地域支援課染谷主幹)

左様である。ただ全体的に教育委員会のほうで中学校区というところでの考え方が薄くなってきているというところではある。

(三牧副委員長)

現在、中学校が含まれていないコミュニティエリアはないのか。

(地域支援課染谷主幹)

前回の資料でお示しさせていただいたが、ない例もある(旭町, 柏中央, 富里)。

(根本委員)

分割を前提に、どうしてふるさと協議会を作らなければいけないかということだが、町会の域を越えてふるさと運動を熟成するという目的でふるさと協議会ができた。もし仮に柏の葉地域が開発されなければ、この話しあいをする必要はなかった。行政からすると行政の連絡がスムーズになる。いろいろなご意見もあったが案3はふるさと協議会をふたつ作るということで費用対効果, コストの面を考えても疑問がある。案2は価値観がずれてくるのではないかと思う。案1が活動が進むのではないかと思う。

(大野委員長)

行政の視点からはどうか。

(宮島保健福祉部長)

コミュニティの適用論点は防災, 高齢者支援, 子育て関係そういったところなのかなと思っている。どの案を推すかは立場上差し控えさせていただきたい。合理的な地域特性, 交通事情であるとか, 非常に大きな問題になると思う。地域特性や個別の課題はそれぞれのニーズにあわせて活動している。支えあい活動などは世代を超えた連続性とか面的な広さとしてのつながりも求められる部分がある。例えば活動形態として自助, 互助, 共助, 公助というものがあるが地域特性を踏まえたほうがやりやすいとは思いますが特性自体は時間とともに変わってくると思う。幅広い年代や層が特性を超えて連携をする仕組みが保健福祉部が所管している事業のなかでは必要となってくる場合が多いし, 今の施策のやり方からしても共生社会ということで高齢者だけではなく, いろいろな様々な課題を抱えている人たちが連携をして, それを推進していくというのがトレンドになっているので, そういった方向性が求められていく可能性が強いという認識は持っている。

(篠原市民生活部長)

以前地域づくりに携わったことがあって旧沼南地域のふるさと協議会を作るときも大変だったという認識でいる。エリアの見直しがテーマになっていると思うが, 大前提はふるさと運動を推進するという事にある。そのためにエリアの設定をするということ, そして活動を推進するために近隣センターを整備するという流れだったと思う。そういったことを考えると今回1本でいくのか, また分割するのか, 分割をする場合は新しいところがそういった活動を担う意識があって行なっていくものと思っている。ということから1本にするのか分割するのか, いずれにしても形としてはふるさと運動がより一層力強く推進されるということが大事。もう一点, 案2について民児協はすでに活動が進んでいる。分割する際にはそういったことも

配慮していただければと思う。

(大野委員長)

いくつか論点が見えてきた。ひとつはコミュニティエリアの分割の問題と同時にそれがふるさと協議会，あるいはふるさと運動を推進していくということで運営主体をどうしていくかという問題がある。ここで提案させていただきたいのだが大きく分けて3つのグループに町会が分かれるかと思う。ひとつは若柴町会，新若柴町会，それから東十余二町会，比較的，地のかたが多い。それから柏の葉一丁目から三丁目，これは連絡協議会を持っている。それから，まちづくり協議会というかたちで。全体でもあるが少し分科会的に各グループごとに話をさせていただくというのはいかがでしょうか。

(金井委員)

意図がわからない。分けることによって，かえって変な境界線を引くことにならないか。先ほど宮島部長が言ったように世代間を越えて助けていく，互助のような体制を作らないと高齢社会を乗り切れない。そのときに地域特性だけ見て分けてしまったら変な議論になる。対立を煽るような誘導ではないか。

(大野委員長)

わかった。最終的に私のひとつの意図は案1にしろ案2にしろ，ある程度今のグルーピングのなかで意思決定していただくかたちになっていくかと思っている。今の感じだと積極的に案3を支持されるかたはあまりなかったので，案1か案2かを詰めていく時期になってきているかと思う。このまま案1か案2かで進めていきたいと思う。

(伊藤委員)

前回教育委員会の意見を聞きますという話があったが，教育委員会の実際の意見はどうだったのか。時代とともに変わるからということなのか。

(地域支援課染谷主幹)

詳細は聞けていないが，現状，学区は学校のキャパシティにあわせて設定していると教育委員会からは聞いている。今後それがどう変わるかは聞けていない。

(伊藤委員)

コミュニティエリアを決めていくなかで，教育委員会は時代とともにかわるのだからという話なのか，何かご意見はなかったのか。

(篠原市民生活部長)

前所属が教育委員会で生涯学習部だったので直接担当していたわけではないが，教育委員会の考え方としてはコミュニティエリアを中学校区で，という考え方はあるが従前どおりの中学校区に縛られるわけではないと推測している。逆に全体感からすると地域で子どもを見守り，育てる，という考え方が国のほうからもあって，地

域と児童との関係がよくなることを望んでいる、という流れがある。

(伊藤委員)

ごめんなさい。よくわからなかった。

(篠原市民生活部長)

地域で子どもを守っていくという考え方は間違いなくある。多世代交流で上手くいく関係を築きたい、日常生活のなかでボランティア活動を一緒にやっていきたい、ぜひお願いしますという考え方。学区というのは大事だという考え方はある。

(伊藤委員)

コミュニティエリアと学区との違いについてはどういうふうに考えたらよいのか。

(篠原市民生活部長)

本当なら一体的なほうがよりよいと思う。

(沖本地域支援課長)

前回の会議から今日までの間で教育委員会と話していない。ただ学区とコミュニティエリアのずれについては勿論、教育委員会もよくわかっている。地域活動を展開するうえで学校を中心と考えるとなかなかやりにくいということは教育委員会も我々も認識している。ただ、これをどう解決するか、ガラッと学区を変える、ガラッとコミュニティエリアを変えることもできないという現状のなかでは長期的に課題として取り組んでいこうという認識は持っている。

(根本委員)

地域の分割と教育は別で考えていくべきだろう。社会教育法もかわった。今後教育はコミュニティ教育に移るはず。地域が先か教育かといえば地域が先。教育はそれに追従していろいろ考えていくというステップのほうがよいだろう。地域の分割ありきで話を進めていただきたいと思う。もちろん教育は追従する問題で非常に大切だと思うが、まずは地域の分割、地域のあり方を考えていくのがプロセスとしてよいだろう。

(大野委員長)

学区の話も含めてこれは長期的にみていかなければいけないということで、今回についてはまず地域の分割ということ、コミュニティエリアをどうするかということ、を前提でその上で子どもたちの問題を考えていくというかたちでいかがだろうか。

(金井委員)

話をまとめると案1か案2だろう。考えるポイントは10年後をどう描くかが必要だろう。基本的には性別的にも年齢的にも多様な人が住む地域が望ましいと思っている。年齢とかそういったことで分割するのは大反対。むしろ行政として多様な人が住んでる中でバランスをとれたら人口構成に着眼すればよいと思う。10年後を予想すると案2がよいのではないかと思う。10年後の姿を描いてみる必要がある

と思うので10年後の人口構成がどうなるかという数字があれば参考にすべき。

(増田勝美委員)

案1がよい。10年後、将来的に案2のような形に移行できることが可能であれば今は案1でいきたい。それが無理だという話であれば考え直さなければいけない。

(増田明委員)

案2がよい。柏の葉小が平成24年に開校し若柴町会からはほとんど田中小、田中中に通っていたが開校と同時にほとんどのかたが柏の葉に移った。最近は新しい住民も増えて、病院跡地にマンションができたりしている。我々が移動しなければいけないのではないか、行政からの指導ということがあれば仕方ないのではないか。

(沖本地域支援課長)

先ほど東十余二町会から将来的な見直しの含みはあるかというご質問を頂戴した。実は今回話を伺っていてキーワードをふたついただいたかと思っている。ひとつは地域特性は何かというご質問に対して、岡田副会長から土地への愛着ということがひとついえるのではないかと、というお話を頂戴した。代々その土地に住んでいるかたなのか、新しく柏にここ何十年間のなかで移り住んでいるかたなのかというところの差がもし地域活動をするうえでの差が大きいとすれば、今どちらにつくかということで非常に会長さんがご発言しにくい若柴町会さんとか東十余二町会さんというのは、元々は土地付きの方々にいらした土地に新しいかたがどんどん入ってきていて地域特性が町会のなかでも気持ちがどんどん変わってきている地域だと思っている。もうひとつのキーワードを頂戴したのが柏の葉一丁目の会長のほうから地域特性は変わっていくものではないかという話があって、まさにそのふたつの町会の地域特性がおそらく劇的に、これまでの10年間、これからの10年間で変わるのだろうと思う。あとは今後10年後にその地区がどうなっているかということ踏まえて人口もそうだが10年後を先取りして今分けておくのか、今は今でわけて10年後ないしは5年先ぐらいに再度検討するのか、というところの違いなのかなと感じている。現状で分けると案1になって、10年後を考えると案2になるのかと思う。行政として結論を出すわけではないが論点的にはそういう整理になっていると感じた。あと人口が今後10年区画整理で増えるのはおそらく若柴町会だと思う。そうすると案1だとそんなに人口は増えないかもしれない。

(大野委員長)

確認だがまだ区画整理は5年くらい進んでいくという前提でよいのか。

(都市部南條部長)

区画整理だが、平成34年で推計で1万900人、平成44年で1万4,400人というかたちで推定している。

(三牧副委員長)

まちづくり協議会の範囲について、明確に定めているわけではなくて例えば三井不動産の開発しているマンションの外側に今どんどん出来てきている中で管理組合や町会とどこまでまちづくり協議会と一緒にやっていくのかというあたりも議論している。なので案1になった場合も5年固定といったわけにはならなくてもっと流動的に動く可能性があるのでは。

(山境委員)

一旦は案2に分けておいて見直しをかけて柔軟に考えていくというやり方もあるのでは。

(大野委員長)

一番悩ましいのは東十余二町会ではないかと思うが。

(増田勝美委員)

ここで結論を出してくれといわれると難しい。町会全員の意見を聞くのは無理。この会で決まったものを理解してもらえない。希望は案1、将来的には案2というのが希望。

(山境委員)

個人的には案1がやりやすいと思う。ふるさと協議会を立ち上げるとなったときに柏の葉一丁目～三丁目はすでに連絡会があり意見集約がしやすいというところと、一番街～ゲートタワーに関してはまちづくり協議会があるので立ち上げて意見を集約して活動していくという観点からすると案1がいいのかなという感じがする。ただそのときの人口状況を見て見直ししていくというのはあると思う。

(石毛委員)

柏市は元々案2だと考えていたのではと思う。ただ話を聞いていく中で案1もあるのではということで議論をしたのだろう。意見集約は難しいと思うが、実際、近隣センターを建てるとなると、わざわざ遠くに行くというよりは近くのほうがいいよね、という話になると思うので段々案2に近づいていくというふうになっていくのかなと思っている。あとはどれくらいのスパンで見直しをかけるかということが明確になっていないと意見が出しづらいのではないかと思う。

(大野委員長)

当面は案1で出来るだけ早いうちに見直しを考えていくということになるだろうか。そういう意味でいうと案1について他の町会がどういうふうに判断されるかという問題に段々なってきたのかなと考える。大勢でいくと比較的案1のほうがまとまりやすいのではないかというかたちで、しかし、その他の4町会については、これからどうしていくかということ、新しいコミュニティエリアにどうするかたちで移行していくかということを考えていく。もしかしたら最初の立ち上げの段階から入られるというのもひとつ、可能性としてはありうるのかなと考えている。次回

への宿題として、町会の中で議論を出していただくというかたちで次回への持ち越しということではいかがだろうか。

（増田勝美委員）

次回までに案1か案2か、はっきりした返事を持ってきてくれということによろしいか。

（大野委員長）

場合によっては、案1にプラス何らかの形ということもありえる。

（高橋地域づくり推進部長）

市としては柔軟性を持って考えたい。案1をベースとして、町会として、どちらに入るかご判断いただければいいのでは。

（沖本地域支援課長）

次回までの事務局側の宿題として、もし案1からスタートした場合にどんなふうな見直しのタームであるとか、今回の結論は、おそらく案2が望ましいであろう、とただそれを今、分けるかどうかというところの議論かなと思っている。なので、もし案1からスタートした場合にどういう流れで案2に移行していくのか、という時間的なものですか、おそらく、もし近隣センターを作るとしても、その近隣センターが抱える人口規模がどうなるかというのを見ないといけないので、その辺の行政の計画の推考する期間があるので、案1からスタートするのであればどんなふうに案2に移行するのか計画を作りたいと思っている。もしくは案2でスタートした場合に既存のふるさと協議会との活動のすり合わせですか、おそらく、もしくはふる協を立ち上げるときの課題ですか、というところもあるかと思うので、そのあたり事務局で整理してご提示できればと思う。

（大野委員長）

先ほどから出ておりますけれども、コミュニティエリアの問題と同時にそれをこれからふるさと協議会の中でどういう運営していくか、三町会の連絡会プラスまちづくり協議会のほうで、ということで、それから4町会のほうがどう絡んでくるかという運営の話もしていかないといけない。次回はそのあたりも含めて、というかたちになるかと思う。まとめると、とりあえずは案1をベースとして考えていくけれども、しかし案2の方向も将来的には見据えていく、先ほどのタイムスケジュールで進めていくかということも含めて、逆にいうと今の4町会については各町会ごとの意志を確認していただくというのを次回までにお願ひできればと思う。

（金井委員）

市にお願ひしたいのだが、案1と案2に分けて、10年後、2040年くらいまでの人口のピラミッド構成を知りたい。もうひとつは、ある程度の世帯を有するコミュニティで高齢者対策がうまくいっているところがある。そのサンプルがあれば教

えていただきたい。確か8千世帯くらいで千葉でうまく活動しているコミュニティがあったはず。高齢者のコミュニティを支えていくにはある程度の人口がいないと支えられない。財政的な意味も含めて、マンパワーも。

（企画部飯田部長）

推計人口については、より地域が細かくなればなるほど難しくなってくるという現状がある。どこまでできるかについては、今日の資料でお示ししているように田中地域の2025年までのこんな推移しますよというのはお示しできる。これはその先も実はできている。こういう統計というのは先にいけばいくほど数字が怪しくなることがあって、なおかつ地区を区切れば区切るほど余計怪しくなるというところがある。担当に持ち帰って話をしてみるが、出来る範囲で皆様のご議論の参考になるような数値はお出しできるように努力させていただきたいと思う。

（大野委員長）

それではちょうど時間になりましたので。

6 閉会

7 次回開催日時（予定）

平成30年9月22日（土）午前10時から
東葛テクノプラザ 第一研修室